



日本聖書神学校 学 報

Japan Biblical Theological Seminary

〒161-0033 東京都新宿区下落合 3-14-16・☎03-3951-1101～2・Email: jbts@jbts.ac.jp

2009年11月20日

第132号

発行人 今橋 朗
印刷所 山猫印刷所

今号の内容

巻頭言	1
オープンキャンパス報告	2
全校修養会講演要旨	2
図書館だより	3
シンポジウム報告	3
60周年刊行に向けて	4
入試要項	4

Flowers of the garden 庭の草花



りんご (apple、林檎)

学名: Malus pumila

聖書には多種の果実が出てくるが、林檎は同定するのが最も困難な植物である。中央アジア原産でパレスティナは生育の南限。果実は小さい。杏(プラム)や扁桃(あめんどう)と同一視する研究者は多い。

雅歌には4回出てくるが、その木陰の心地良さ、その香り、癒しの効力が歌われている。人間に不幸をもたらしたエデンの禁断の木は林檎だったという俗説は、ラテン名(malus)が「悪・不幸」と同じ語だからであろう。ドイツではChristbaum(ツリー)のモミの木(生命)に燭火(信仰)、星(希望)と共に林檎(愛)を吊るす。

神学校では図書館入口の対面に5米程のヒメリンゴの木が今、果実をたくさんつけている。

【巻頭言】

クリスマス黙想

—「処女降誕」を巡って見えてきたもの



教授 郷 義孝

序 景気の低迷と閉塞感は、その矛先をキリスト教の教勢の減退にまで向けてきた感がある。日本の教会はここ数十年、教勢の横ばい状態が続いており、その原因を対立する相手に帰し、一方で社会的関心を持つ立場を、伝道をおろそかにしていると断罪し、他方は開かない権威主義・教条主義的な教会の姿勢にこそ問題があったと言う。では本当は何が問題なのか。

1 実は、キリスト教の減退はアメリカも同様だ。J.カブ Jr.は『教会の再生』という本で、米国の教会の現状と問題、再生の道筋を探る。彼は米国の教会も二分し、古い伝統的な教会神学の確信のなさとその結果としての熱意の喪失、留まる場所は「生ぬるい」信仰だと指摘する。その原因は、内在する「父権主義」、「反ユダヤ主義」、「合理主義・功利主義的経済至上主義」、「専門化した神学」、「環境問題」などにキリスト教独自の立言や応答が出来ないことなどをあげる。

神学を教会や牧師の手に取り戻し、考える信徒を生み出すことが再生の道筋だと言う。

2 以下、父権主義に関して、「処女降誕」の問題を考える。

「処女降誕」の起源には諸説がある。例えば、処女降誕は言語学的な誤謬に端を発するというもの。マタイの「処女」(おとめ)はイザヤ書の預言に基づくが、ヘブル語は「若いおんな」の意味でしかなく、それは70人訳ギリシャ語聖書の誤訳に由来するというもの。或いは社会的に、当時、誰が子供の父親かを同定する技術はなく、不都合な妊娠・出産後も女性は引き続き処女とみなされた。子供も「マリアの子」などと呼ばれたし、今日でも欧米では母親がユダヤ人であれば、子は皆ユダヤ人とされる。

処女降誕の「奇跡」、「神の母」や「マリアの被昇天」などの教義が生じてくるのは中世以降だし、19世紀以降の近代聖書学の成立は生物学的な事実と絡む議論やブルトマンの解釈学的な理解を生んだのは周知のことだ。

3 それでは処女降誕物語に隠された女性観とはどのようなものか。まず、創世記による女性の創造は、男性から生じたと告げる。男性の腰(ロイン)には人の全可能性があり、女性は栄養をあげるだけだと見られたのだ。

従って、罪に汚れたアダムの子孫はすべて罪の統一のうちにあり、系図はその連鎖の道具立てをした。

この系図とセットになるのが「処女降誕」だ。マタイの生きたヘレニズム圏の大哲学者アリストテレスは、男性こそ「形相」(Form)、女性は質料(Material)だとした。つまり、人間の靈魂は男性にのみ起源があり、女性は単なる材料だと考えたのだ。

ここにユダヤの父権主義とヘレニズムのそれとの邂逅による論理的な神学的な構築が可能となった。無原罪のキリストはアダムとの連鎖ではなく、父なる神の形相でなければならぬ。でなければ信仰をもって結ばれる者を罪なき贖いに導くことはできない。

結論を言えば、処女降誕の物語は神話(シュトラウス、ブルトマン)などではなく、意図的・神学的構築なのだ。そして、この神学的枠組みは、その後の西洋精神史の女性観の根幹となり、今日に至り着く。時に女性を尊厳視し、神聖視するかのよう緻密かつ巧妙な装いをもって。

4 私たちはこの神学に今日どのように向き合えば良いのか。答えは、「知恵を深め、変革せよ!」ということだ。キリストは知恵の体現者、救済者でもある。旧約の伝統には祭儀的ななだめの供え物や犠牲による救済論だけではなく、知恵による救済の伝統がある(西村俊昭の論文参照)。知恵は我らの内にいまし、共にいます(インマヌエル)救済者である。「新しいキリスト教」の道筋は、私たちに応答を求める。変革せよ! 変革に変革を重ねよ!と。

結果として、このキリスト教こそ21世紀の男女を魅了するものだと信じる。その時多くの人々が、もう一度キリスト教に目を向ける可能性がある。これが私のクリスマスの黙想である。

クリスマス礼拝のご案内

と き: 2009年12月11日(金)
18:30～

ところ: 日本聖書神学校 礼拝堂
説 教: 「クリスマスの旅路」

深澤 奨 先生

(日本基督教団佐世保教会牧師・九州教区議長)

オープンキャンパス報告

オープンキャンパス実行委員長 関 伸子 (2年生)

5月から準備を進めてきた神学校の大きなイベントの一つであるオープンキャンパスが、10月27日(火)に開催されました。前日は一日中雨でしたが当日は天候にも恵まれ、100名以上の方々がオープンキャンパス礼拝に出席しました。今年は「つながろう。つなげよう! JBTS ~アンデレのように~」をテーマとして、東美教会副牧師の陣内大蔵先生(本校59回生)に音楽礼拝を担当していただき、歌と歌の間に「神さまの作品」(マタイ22:36-40)と題したメッセージを入れるという画期的な試みがなされ、わたしたち一人一人が神さまに愛されている存在なのだということを賛美とメッセージから受け取りました。礼拝開始30分前に音楽担当の河野先生が急用で欠席という連絡があり、今橋校長に代役をお願い

するというハプニングもありましたが、順調に礼拝が進行したことをあらためて感謝します。

公開講座は、本校講師の戒能信生先生に「プロテスタント宣教150周年を考える」というテーマで講義をしていただき44名の出席がありました。私の所属教会から参加された方は、公開講座の内容は「目からウロコ」で、何かを新しく学ぶことの魅力を思い起こさせられたと喜んでいました。

実行委員会では、在校生の人数が少なく4年生はほとんど事前準備は手伝えないこともあり、前年までの内容を変更しなければならないかもしれないということも話していましたが結果的には礼拝、公開講座、復活書店(古本屋)、カフェ、入学相談コーナー、キャンパスツアー(学校見学)といった例年と



同じ内容のことは行うことができました。夜学の神学校で、授業の終わった9時半から準備委員会をもつことは、学生達にとって時間と労力のいることですが、お支えをいただいている諸教会の信徒の方々に神学校生活をじっくり味わってもらうために、また、献身を考えている方々が神学生や教員と触れ合うことを通して、神学校生活への決意となるときとなるためにも、この企画が、学生みんなの協力のもとに、来年以降も支えられることを願っています。

2009年度全校修養会講演要旨 「公共の哲学について」

講師：稲垣久和先生(東京基督教大学教授)

十八世紀以降、西洋は啓蒙主義、理性の時代に入り、キリスト教は公的な領域から私的・個人的・内面的な領域へと徐々に追いやられた。しかし、言うまでもなくキリスト教は、本来そのような性格のものではなかった。「イエス・キリストは、私的な宗教ではなく神の国を宣教したのである。イスラエルの貧しい者、病める者のために神の国を宣教し、それゆえに、ローマ帝国によって公的に十字架に処せられたのである。」(稲垣久和著『公共の哲学をめざして』102頁)。

アメリカにおける「教会と国家の分離」は、確かにキリスト教を公共の場



から排除していると言えるが、しかしヨーロッパにおいては、フランスを別として、政教分離はない。キリスト教民主主義の政党は、自由民主主義とも社会民主主義とも違う立場で、キリスト教的価値を政治に反映している。実際、現在地球上で宗教を、政治、経済、社会と関係なく、「心の問題」として片付けてしまう人は、むしろ少ないと言える。とくに福祉の問題などは、宗教ぬきには考えられないのである。

宣教とは何か。それは公共の場に派遣されることではないか。それができていないから、日本のキリスト教は全人口の1パーセントにとどまっている。日本のキリスト教は、政治、教育、芸術、ジャーナリズムなどの分野にもっと人材を送り込み、日本社会の行きすぎた競争、友を思いやることのなくなった風潮を変えてゆく隣人愛を、どのように実践していくかを、重要な課題とすべきであろう。

市民社会は西洋においてキリスト教の伝統の中から生まれたものであり、



東洋に市民社会は果たしてありえるのか、とよく言われる。しかし東洋にも儒教の「仁」、すなわち隣人愛の思想があり、市民・友愛の概念がある。また、今、日本における生活協同組合の創始者でもある賀川豊彦の仕事に対する再評価が始まっている。教会には「制度化された教会」と「有機体としての教会」があり、同心円的に二重、三重のキリスト教の共同体があつてよい。

(2009年10月30日、於・高尾の森わくわくビレッジ、参加者34名、文責：鈴木脩平)

図書館だより

日本聖書神学校キリスト教研究所図書館

No.4

図書館長 石川栄一

より活発な図書館利用を

読書の秋も深まってきました。図書館が開設してから1年半(準備など実質期間を含めると2年)が過ぎ、ILLなど館内の様々な諸機能も徐々に整えられ、利用者の数も増えてきました。夕方の授業開始前などには閲覧席が一杯になることもあります。けれども図書館側としては、もう少し、皆さんに利用されることを願っています。

教師検定試験準備にも

周知のごとく、去る9月15日(火)～17日(木)大阪で09年秋季教師検定試験が行われました。正教師試験は64名中、合格者は33名。補教師試験は25名中、わずか2名の合格者であったと教団新報は報じています。Cコース受験者が多い秋季試験とは云え、なかなか厳しい現状のようです。検定委員会

のまとめは、次のように語っています。「提出物の課題・学科試験の問題のいずれにおいても、毎回、基本的なことを求めてきた。つまり教師として宣教にあたる時、どうしても整えておかなければならない事柄を問うてきた。事前に提出を求められる聖書釈義・説教や論文課題は、現場の多忙を理由に諦めてしまわずに、工夫して時間を作り、真摯に取り組んで欲しい」。さらには「神学的思索に欠ける答案が多い」とコメントされています。わざわざ検定試験のために図書館に来る必要はないと思いますが、「日常の研鑽を積むことが大事」と検定委員会が指摘しているように、普段から読書力をつけ、神学的思索を深める作業を積み重ねることが求められているように思います。

特色ある図書館に

少し、説教調の語り方をしてしまいましたが図書館としても、皆さんに愛され、使いやすい場を様々に提供させて頂きたいと考えています。どうぞ、ご意見・ご希望を、お寄せください。

過日、本校理事長の久山先生とご一

緒して、東京神学大学と日本ルーテル神学校の図書館を見学する機会を与えられました。東神大は組織神学に関する貴重な本を、ルーテルは当然ながら、ルターに関する豊富な文献を揃えていました。それを知って遠方より、来館する人が多いということです。

私たちの図書館でも、今、蔵書の収集方針を色々な角度から検討しているところですが、こうした特色ある図書館を目指したいと個人的には念願しています。そのために色々な図書館を機会の許せる限り、訪問・見学したいと望んでいます。

返却の延滞者も減りました

延滞数も当初に比べれば、ずいぶん減りました。規則を理解していただいたこともあると思いますが、図書館の本は、公共のものであり、ひとりの人の延滞が他の人に迷惑をかけるという、ある意味、当然のことがご理解いただけたと認識しています。これからもよろしく願います。

—シンポジウム報告—

『エキュメニカルな信仰告白に向けて』

今橋 朗

故・三小田敏雄教授と当時の歴史神学ゼミのメンバーによって翻訳された、世界教会協議会(WCC)信仰職制文書『エキュメニカルな信仰告白に向けて—今日ののためのニカイア信条解説』(2007)をめぐるシンポジウムが、本校恒例のJカフェの一環として、9月15日礼拝堂を会場に行われました。

エキュメニカルな試みにふさわしく、シンポジストとして各教派から次の方々に発題をお願いしました。カトリック教会から山岡三治氏(上智大学神学部)、改革長老派から小坂宣雄氏(日本キリスト教会牧師)、ルーテル派から鈴木浩氏(日本ルーテル神学校)、聖公会から菅原裕治氏(司祭、本校講師)、柳下明子氏(本校講師、教団教師)。ただし東方正教会からのシンポジストを迎えられなかったことは残念でした。全

体の司会は、本書の監訳者、笠原教授が担当しました。

当日はまず、原著の背景について、当時WCC信仰職制委員会常任委員だった私が刊行意図等について報告紹介しました。WCCのこの部門がエキュメニカル運動の内実と基礎づけのために建てた研究プロジェクトは3つあり、その成果を世界の諸教会と共有することでした。(1)「洗礼・聖餐・職制」の相互理解のための研究は、いわゆる「リマ文書(BEM)」として纏められ、これはいち早く邦訳されました。(1985年)。(2)「教会と世界—教会一致と人類共同体の革新」。(3)今日のおける使徒的信仰という研究の成果(1991年)が、ここに邦訳されている文書です。日本のキリスト教界がほとんど着目してこなかったこの文献を、日本聖書神学校神学叢

書の一冊として刊行できた意義とその貢献は小さくありません。

シンポジウムでは、各発題者がそれぞれの教派的伝統と現状を踏まえて、ニカイア信条(381年版)の本文解釈(フィリオクエ条項など)、その教会史的意味、聖書神学との関わり、教理と信仰告白、典礼的实践、教会形成、宣教論、職制と教職養成、エキュメニズムなど広範な領域に係わる視点から発言し、またフロアからも、教会の一致とは何か、その今日的展開、殊に宣教と倫理への展開などをめぐって活発な質疑や意見交換がなされました。

シンポジウムの後、図書館棟一階ホールに場を移し、シンポジストを交えて自由なお茶と懇談のひと時が与えられたことも有益でした。遠方からの参加者もあり、各教派の教職者を中心に出席者は47人でした。なおこの集会の報告記事は「キリスト新聞」9月26日号に記載されました。

神学校らしい企画として、今後同様の集会を望む声も多く聞かれました。

日本聖書神学校 60年史刊行に向けて

編纂委員 齋藤 篤 (58期・岩本教会)

このたび、『日本聖書神学校 60年史』(仮称)の刊行に向けて、編纂委員会が発足されました。郷義孝教授を委員長とし、教授・卒業生・教会関係者により編纂委員会が構成されております。既に、去る7月23日(木)に第1回委員会、次いで10月29日(木)に第2回委員会が開催され、『60年史』に関する基本構想および、内容の検討についての話し合いが行われました。今後3か月に1度のペースで委員会が開かれる予定であり、編集が終了し次第、上梓する運びとなります。

さて、神学校はこれまで、学校史に関するいくつかの著作および資料集を発行してまいりました。それは、①創立20周年記念・『日本聖書神学校20年史』(藤田昌直編著、1966年)、②創立30周年記念・『日本聖書神学校30年』(創立30周年記念出版委員会、1976年)、③新校舎竣工記念・『日本聖書神学校学報・合本』(1983年)、④新礼拝堂・図書館建築記念・『日本聖書神学校学報・合本II』(2009年)の4種類です。

そのどれもが、福音宣教の担い手たる伝道者を養成する神学校のあゆみについて、克明に記されております。そのような諸著作および資料集を読み返してみると、変化に富んだどの場面においても、ただ神の助けと主の憐れみを祈り求めてきた先人たちの篤い信仰を改めて知らされます。夜間というある意味で制限された環境の中で学ぶ学生の姿や、それぞれの地

へ宣教者として遣わされた卒業生の働き全体を通して、神様のくすしきみ業というものが十分に働いておられることを実感するのです。

そういうことを考えますと、ここで『60年史』を編纂・発行するという事は、神学校全体の歴史において為されたもろもろの出来事を整理し、文章化することによって、神様の神学校に対する広く深いお働きや、神学校を覚え続けてくださっている方々のお支えに対する「感謝の再確認」と、今後もますます、主のご委託に応え、それぞれの地域で福音を宣教する、教会をはじめとする現場の祈りと要請に応答する、神学校としての「幻の提示」を明らかにする機会であると考えております。

実際、先に刊行されたそれらの記念誌や資料集が、そのような感謝と希望に満ちあふれたものであったということは言う

までもありません。本編纂委員会も、常に発刊することの本質を念頭に置きつつ、刊行に向けて歩んでまいりたいと願っております。

ところで、『60年史』においては、既刊『30年史』以後の30年間の歴史記述のみに止まることを考えておりません。歴史を経るとともに明らかにされてきた神学校史全体を捉えながら、編纂することを目指しております。例えば、日本聖書神学校創立のルーツとなる歴史にも触れ、旧日本福音教会の働きと神学教育、敗戦後における神学校設立に至る敬虔主義的な信仰に重ね合わされるエキュメニカルな動き、それが以後の神学教育にどのような影響を与えたのかについても、さらに具体的に文章化する予定であります。既存の資料をフル活用しつつ、資料集としても、ビジュアルな面からも親しみの持てるような『60年史』にしてゆきたいと思っております。

どうぞ今後とも、アドヴァイスとともに、祈りのうちにこの働きを覚えて戴ければ幸いです。よろしく願いいたします。

写真・当時の資料などをお寄せ下さい。

『60年史』では、神学校の歴史を物語るための資料(記念写真・スナップ写真・神学校発行の印刷物・その他)を、なるべく多く掲載したいと願っております。卒業生をはじめ皆様方には、どのようなものでも結構ですので、それら資料のご提供を何卒お願い申し上げます。

ご提供いただいた資料は、資料として用いた後、責任を持って返却いたしますので、どうぞご安心ください。皆様のご提供をお待ち申し上げます。

(ご提供先)

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-14-16 日本聖書神学校「60年史編纂委員会」行
ご質問は神学校(Tel 03-3951-1101)までお願いいたします。

2010年春季入学試験募集要項

日本聖書神学校は福音主義キリスト教の立場に立ち、主の教会の委託を受けて、聖書に基づき、深い信仰と、誠実かつ熱心な神学研鑽、歴史的現実への洞察と他者に共感できる感性を兼ね備えた、福音宣教への召命に応えようとする伝道者を養成することを目的としています。



問い合わせ

詳しくは学校案内、入試要項をお取り寄せの上、ご覧ください。

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-14-16

日本聖書神学校 総務部

春季入学試験

出願期間

2010年1月7日(木)～2月9日(火)

試験日

2010年2月18日(木)～19日(金)

受験資格

1. 大学卒業者またはそれと同等の学力を有すると本校において認められた者。
2. 受洗後2ヶ年以上の忠実な教会員であり、伝道の召命を受け、所属教会牧師と役員会の推薦するものであること。

- ・日本基督教団以外の教派からの献身者も受験することができます。
- ・最終学歴が大学卒業でない者にも「正科生に準じる者」として入学を許可する場合があります。ただし、入学後、本校が必要と認める学科について所定の単位の修得が必要となります。

クリスマス献金のお願い



救い主イエス・キリストのご降誕を心からお喜び申し上げます。神学生は日々勉学と教会実習にいそしみつつ伝道者としての準備のときを過ごしています。将来、み言葉を一人ひとりの心に届け、配慮に満ちた牧会を行うために、働きながら学ぶ37名を覚えて下さい。1人の神学生の教育費は年間250万円です。皆さまの祈りと献金を心からお願いいたします。